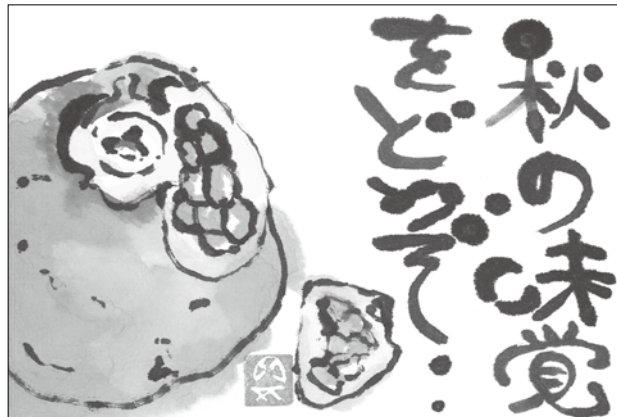


### 組合員の作品

収穫の秋——  
バス停三井泰団地付近  
みい支部 N子



絵手紙 門真西支部 大橋 志江



手芸 ゆうゆう支部 田見 幸子



絵手紙 たんぼぼ支部 高橋 道江



絵手紙 たんぼぼ支部 増井 寸見子

### 短歌

鯛雲夕日に染まり故郷の空より豊後水道沖へ

門真中央支部

兵頭 克己

子連れあり老いも若きも決起して「戦争アカン」と練り歩きゆく

守口さつき支部

中嶋 順子

「戦争アカン」わが家の塀のポスターに生協仲間の注目集まる

守口さつき支部

酒井八重子

### 詩

もうひとつの家族

成田支部 迫田 智代

ある日突然のように

きれぎれの記憶をたどり列車に乗る

いくつもの山や木をみて

とある無人駅に降りる

土と草と野の花

せせらぎの音

山すそのこけむした石段を登ると

静寂な境内に土俵が在った

まるで舞台のように

子ども達の歓声

囲りで声援を送る親達

うねりのように遠くからおしよせ

声と声が光の中で踊っている

虹の輪に浮ぶ家族

どこかなつかしい土の匂いがする

木々の声が聞える

詩集「私の旅」より

# 戦後70年を迎えて

⑩ 最終回

## 父と家と土地を奪った空襲

私は大阪市此花区に住んでいましたが、3歳の時、空襲に見舞われました。

家を焼かれ、土地を失い、父を亡くしました。残った3人の家族もバラバラになり、3人が一つ屋根の下に住むようになったのは私が小学校5年生になった時でした。

家を焼け出された後、石川県の能登にある親戚を訪ねましたが長くは居られず行き場を失いました。「首をくぐる覚悟をした、でも子どもの顔を見たら出来なかった」とは母の弁です。

その後も食べるものがなく、芋などの代用品で、量は少なく、毎日ひもじかったです。

勤めるようになった頃、母は米と麦を別々に洗い釜の中に分けて炊きました。炊きあがったら混ぜるのですが、私の弁当箱には、白い部分の多いところを選んで入れていました。ありがたさと悲しさが胸をよぎりました。

家、土地、父を奪い、母に何度も死を覚悟させた戦争。しかし一銭の保障もありません。同じ境遇の人があまりにも多すぎたからだと思います。もう戦争はくりこりです。

守口さつき支部 岡邑洋介